

学会ニュース No.152

2025年10月31日 全日本博物館学会事務局
〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28
國學院大學博物館学研究室内
E-mail : jimmu(a)museology.jp

*** 目次 ***

『全日本博物館学会創立五〇周年誌』 の発行について……………1	「令和6（2024）年度社会教育調査」の 中間報告……………7
【追悼】博物館の根幹を教えていただいた大先輩 —米田耕司さん……………3	博物館類似施設とは何か？（その1） —広島県江田島編……………8
2025年度 第1回研究会 開催報告 講演会 「國學院大學博物館特別展「アイヌモシリ—アイヌの 世界と多様な文化—」から学ぶこと」……………4	【紹介】大阪市立自然史博物館特別展 「学芸員のおしごと」について……………11
	委員会議事抄録……………12
	会員情報……………12

『全日本博物館学会創立五〇周年誌』 の発行について

この度、全日本博物館学会創立50周年記念事業の一環として企画しておりました、『全日本博物館学会創立五〇周年誌』（全日本博物館学会創立五〇周年誌編集委員会・全日本博物館学会事務局企画・編集／2025年4月30日・全日本博物館学会発行／A4版全142頁）を無事上梓しました（目次は、次頁に掲載しております）。会員の皆様には既にお手元にお送りしたところですが、制作の遅れ等諸般の都合により刊行が遅れておりましたこと、重ねてお詫び申し上げます。

本会の第5代会長を務められた加藤有次氏は、2003年度の第30回総会・第29回研究大会の一環として開催されました全日本博物館学会創立30周年記念講演の中で、本会のこれまでのあゆみを「学会史」としてちゃんと将来まとめておかなければならないんじゃないだろうか（「博物館学にみる博物館学会—全日本博物館学会30周年を迎えて」『全日本博物館学会三十年のあゆみ』より※テキストは本誌でも収録）と仰られておりましたが、関係諸氏のご協力の下、2023年9月17日に開催しました創立五〇周年記念国際シンポジウムの記録と共に50年にわたる歴史をまとめたかたちで振り返ることが可能となる内容に仕上げる事ができたと確信しております。本誌が、日本の博物館学を牽引してきた全日

全日本博物館学会
創立五〇周年誌



『全日本博物館学会創立五〇周年誌』表紙デザイン

本博物館学会のこれまでの50年を振り返るとともに、これからの全日本博物館学会、そして博物館学のあり方を会員の皆様と共に考えていくためのきっかけとなることができましたら幸いです。（全日本博物館学会事務局）

『全日本博物館学会創立五〇周年誌』目次

ご挨拶 半田昌之（全日本博物館学会会長）

ご挨拶 布谷知夫（全日本博物館学会名誉会長）

全日本博物館学会創立五〇周年に寄せて

全日本博物館学会創立五〇周年記念寄稿

博物館人としての七〇年 下津谷達男（全日本博物館学会発起人・野田地方史懇話会会長）

日本の博物館と周辺の五〇年を考える 森田恒之（国立民族学博物館／総合研究大学院大学名誉教授）

創立五〇周年を迎えて—その揺籃期の思い出 米田耕司（全日本博物館学会発起人・長崎県美術館相談役）

全日本博物館学会創立五〇周年に寄せて

創立五〇周年に寄せて 鷹野光行（第7代全日本博物館学会会長・お茶の水女子大学名誉教授）

創立五〇周年に寄せて 矢島國雄（第8代全日本博物館学会会長・明治大学名誉教授）

創立五〇周年に寄せて 駒見和夫（全国大学博物館学講座協議会委員長）

創立五〇周年に寄せて 山梨絵美子（公益財団法人日本博物館協会会長）

国際的に活躍できる博物館人材の育成を 青柳正規（ICOM日本委員会委員長）

創立五〇周年に寄せて 若生謙二（日本展示学会会長）

創立五〇周年に寄せて 小川義和（日本ミュージアム・マネジメント学会会長）

全日本博物館学会創立五〇周年記念事業の記録

全日本博物館学会創立五〇周年記念事業

ご挨拶 布谷知夫（全日本博物館学会会長〔当時〕）

全日本博物館学会創立五〇周年記念国際シンポジウム

日本の博物館の未来を拓く—国際的潮流から考える スアイ・アクソイ（第13代国際博物館会議会長）

【英語原文】Towards Creating the Future of Japanese Museums — International Trends in Perspective —

全日本博物館学会創立五〇周年記念ワークショップ

日本の博物館の未来を拓くには

全日本博物館学会創立五〇周年記念オープニング・ビデオ

制作チームより

全日本博物館学会の五〇年

全日本博物館学会 概要

全日本博物館学会 ロゴ

全日本博物館学会 沿革

総会及び大会 一覧

研究会 一覧

全日本博物館学会代表委員・会長・名誉会長及び顧問

全日本博物館学会役員等 一覧

博物館学雑誌 総目次

全日本博物館学会賞・奨励賞・特別賞 一覧

全日本博物館学会創立関係資料集成

【正誤表】『全日本博物館学会創立五〇周年誌』につきまして、下表の通り目次に記載の頁番号に一部誤りがございましたので、この場を借りて訂正お詫び申し上げます。

	誤	正
7頁目次	日本の博物館の未来を拓くには 52	日本の博物館の未来を拓くには 51
7頁目次	制作チームより 56	制作チームより 55

【追悼】博物館の根幹を教えていただいた大先輩—米田耕司さん

私が博物館学、そして博物館活動をするにあたり、その基礎となる考え方を教えてくださったのが、米田耕司さんでした。國學院大學の大先輩であることはもちろんですが、学会活動やそのほか新潟で博物館活動している中で本当に心に残る言葉をいただきました。

その米田耕司さんが、9月24日、彼岸へと旅立たれました。あまりに突然の訃報にうろたえました。すぐに何ができるわけでもないのはもちろんですが、いろいろなことが頭を駆け巡りました。米田さんのあの声が、何度も頭の中で再生されています。

「山本君、人間には生きていくために必要なものが3つあるんだよ。一つ目は“腹の足し”になるもの、二つ目は“体の足し”になるもの、そして三つ目は“心の足し”になるものなんだ。その“心の足し”を満たすために、博物館、美術館ってのはいろんな活動をしなければならないんだよ、ねえ、山本君！」

その力強い口調に、なるほど！と思いつつも、その“心の足し”を本気で考えざるを得ない場面がまさか来るとは思っていませんでした。

新潟県立歴史博物館在籍時、2004年10月23日に発生した新潟県中越地震という大災害に直面しました。被災者は心に大きな傷を負ってしまった。その被災者の“心の足し”になることが博物館にできないのか。米田さんの言葉を思い出しつつ、考えて考えてさらに考えてはみたものの、なかなか思いつかず、苛立ちさえ覚えました。しかしある時ふと思いついたのが、原田泰治先生の日本の原風景を描いた作品の展覧会。被災してギスギスした心を和らげてくれるのではないかと考えたのです。米田さんなら「それだよ、山本君！」と言ってくれる気がしたのです。まさしく米田さんの言葉から生み出されたと言っても過言ではありません。

そうして震災の翌年、3月から4月にかけて復興支援展覧会を開催しました。まさに博物館は“心の足し”を満たす活動ができると確信した、そういう経験となったのです。

その経験をもとに、『博物館研究』52-8で特集「博物館が復興に果たす役割」（2017）を博物館研究編集委員として企画、編集し、その巻頭エッセイを米田さんにお願いしました。というか、米田さん以外にこの特集の巻頭を飾れる人はいないとの確信のもとです。そのエッセイで、さらに教えていただいたのが、博物館は人の命も守るということです。

自ら命を絶とうと考えていたある男性が、ふと大原美術館に立ち寄り、関根正二作「信仰の悲しみ」を眼にし、身体の内から込み上げるような勇気、生きる意欲が湧いてきて、命を絶とうとするそれを思いとどまったという逸話です（詳細は是非とも上記『博物館研究』を読んでいただきたい）。

この巻頭エッセイを得て、そのあと山本が総論「復興に果たされる“博物館のチカラ”とは何か」を書きました。自分で言うのもなんですが、本当にいい1冊になったと思っています。これもすべて米田さんの言葉があったお陰であり、米田さんが導いてくれたお陰です。

その後も米田さんからは、会うたびにさまざまチカラとなる言葉をいただけてきました。まさに博物館学の恩人と言える方でした。思い出は尽きませんが、今、こうやって博物館学に取り組めるのも米田さんのお陰であるところが多く、そして米田さんあっての“博物館学の山本”だと思っているのです。

米田さんの、後進を導くためにまだまだ現役を貫こうという姿勢を強く感じていました。米田さん自身によることは叶わなくなりましたが、その思いが絶たれることなく、米田さんのその言葉を、ごくわずかでも代わりに後進に伝えていかなければならないと思っています。

博物館は“心の足し”を満たすためにある。それを少しでも伝えていきたいと思います。

私の博物館学徒としての形成に多大なる影響を与えていただいた米田耕司さんのご冥福を祈るばかりです。彼岸とやらで加藤有次先生や旧友の方々と博物館談議に花を咲かせてください。

合掌

（山本哲也 國學院大學）



2025年度 第1回研究会 開催報告
**講演会「國學院大學博物館特別展「アイヌモシリー
アイヌの世界と多様な文化」から学ぶこと」**

はじめに

2025年の第1回研究会は、9月20日に國學院大學で開催され、講師として笹木一義さんをお招きした。笹木一義氏は、日本科学未来館での勤務経験ののち、2017年から国立アイヌ民族博物館（National Ainu Museum）の準備室で勤務していらっしゃる。これまでさまざまな普及業務も手掛け、現在は、海外も含め、多くの博物館等諸施設との資料貸し出しの対応などが中心業務となっており、交渉や手続きに奔走しているとのことだった。海外にあるアイヌ資料の調査結果によれば、2004年時点で約13,500点が確認されており、とくに、アメリカ、ドイツ、ロシアに多いとのことであった。それらの国がなぜ収集したのかその理由はさまざまだが、たとえばウィーン万博の時にアイヌに関する資料が提供されたなど、日本の博物館活動の源流にもかかわるような事実にも遭遇したという。

国立アイヌ民族博物館は2020年7月に開館し、その正式名称は「アヌココロ アイヌ イコロマケル（The house which holds the Ainu treasures we share）」であり、その建物を含む公園全体が「ウアイヌコロ コタン 民族共生象徴空間＝愛称『ウポポイ』（この名称は一般投票によった）」と呼ばれている。館の公式ホームページでは、ウポポイは「アイヌの歴史・文化を学び伝えるナショナルセンターとして、長い歴史と自然の中で培われてきたアイヌ文化をさまざまな角度から伝承・共有するとともに、人々が互いに尊重し共生する社会のシンボルとして、また、国内外、世代を問わず、アイヌの世界観、自然観等を学ぶことができるよう、必要な機能を備えた空間」と紹介されているように、現代社会が抱える「分断と差別」の問題に対峙するうえで、相互尊重に基づく共生社会のありようを模索する大切な場であることがうかがえる。

「ブンカラ」とは

ご講演の中心は、ウポポイが主体となってすすめている「ブンカラ」というネットワークについての紹介であった。そのネットワークは、博物館の設立理念の中で述べられているように、「アイヌの尊厳を尊重し、国内外にアイヌの歴史・文化等に関する正しい認識と理解を促進

するとともに、新たなアイヌ文化の創造及び発展に寄与する」ことを目的としたものであり、「正しい認識と理解」促進は、決して、国立アイヌ民族博物館だけで行えるものではなく、全国の博物館はもとより、研究機関、そして地域での保存会や復興事業に関わっている多様な団体との連携において推進される、という考えに基づいている。

さて、発音してみてもわかることだが、とてもやさしい響きのこの「ブンカラ」とは、アイヌ語で「蔦」を意味することばで、「相互につながる」というイメージによるとのことである。アイヌの歴史と文化に関する資料情報の集約と利活用の促進や様々な事業の活性化を図り、「アイヌ文化の振興と啓発に寄与する」ことを目的として、2016年より準備が始まり、2021年に59機関で発足し、2025年7月現在77機関の参加をみるという。また、その事業には以下の内容が含まれている。(1) 各種資料情報の収集と共有、(2) 各種資料の相互貸借などの利活用、(3) 共同または連携による調査研究、(4) 教育・普及にかかる情報・経験の共有、(5) 所属職員の資質向上につなげる研修会や人的交流の実施、(6) 相互連携による展示会、講演会、研究会等の開催、(7) 所蔵する資料の保存や環境整備、劣化損傷に対する継続的・応急的な手当や支援・指導・助言並びに大規模災害・事故等における資料のレスキュー等、(8) 各種情報発信など。

この組織に入る条件は、アイヌの歴史に関する資料を所蔵しているか所蔵の予定があるということ、歴史文化の理解促進を目的とした主催事業を実施していること、これら2点のうち1点を満たしていることだという。しかも、負担金や年会費はなく、運営資金は国立アイヌ民族博物館から提供される。構想段階からさまざまな困難があったとのことだが、しかし、その着実な拡がりにはまさに「蔦」つまり、絡まり合いながら高みをめざして広がるというイメージそのものである。

筆者は、とくに組織連携の目的に「教育・普及にかかる情報共有」という点に関心をもった。ただ、2019年に「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」(通称:アイヌ施策推進法)が制定されてわずか5年程度であり、この法によって、初めて正式にアイヌ民族が先住民族として法律に明記されたことからわかるように、たとえば「アイヌは山にいるんですか?」「今も生きていますか?」など、まだまだたいへんな誤解がなされているうえ、ネット上では明らかな誤りや、不確かな情報が相当多いという。そのような中、たとえば学校教育内容との関係や、環境教育の一環としてどう位置付けるかなどは、これからの課題のようであった。

ブンカラ協働展示

さて、このネットワーク会員機関は、協働展示やPR活動を行う事で、徐々に増えてきたそうである。地方の会員館には様々な館種が含まれ、植物園や近代美術館、民藝館の名前もある。博物館どうしの連携協力には、あるテーマにそった資料の貸借など、「線のつながり」はよくあることだが、こうして、地図(図1)を見ると、「面としてのネットワーク」を感じることができる。協働展示として、たとえば、国立近現代建築資料館では「アイヌの建築と工芸の世界—チセ、マキリ、アットウシー」(2024年3月)、三重県の松浦武四郎記念館などでは「三重から北海道へ—アイヌ文化と出会った人々」(2024年11月~2025年1月)が企画されている。それぞれの博物館がどのような視点で「アイヌ」の理解を深めてもらおうとしているのか、たいへん興味をそそられる。

この研究会開催日は、会場である「國學院大學博物館」でも、このブンカラ活動の一環である協働展示「アイヌモシリーアイヌの世界と多様な文化—」(図2)がちょうど開催されており、たいへんな人気を博していた。筆者も展示期間内のミュージアムトークに2回参加したが、どちらも超満員であったうえ、関連企画のワークショップやコンサートもすぐに満員御礼になる、という盛況ぶりであった。多くの人が「アイヌ文化」に接し、日々の生活との関連を見出そうとしていることがうかがえる。また、入り口には会員機関一覧も地図と共に紹介されており、この一覧は、施設毎の「カードタイプ」になっていて、QRコードも付いている。ひとつの展示を訪れた人が、このネットワークの存在に気づき、そのつながりにある各館や施設について詳細を知ることができるのである。地図により空間的な拡がりを知り、気になる施設をその場で探索もできる。この相互のつながりの存在を知るだけでも、目の前の展示だけではなく、日本におけるアイヌ文化に多様な視点で触れることができる。

ブンカラでの経験交流

さらに、この連携事業では、スタッフが日々の業務のなかで実際に困っていることをどう解決したらよいかという、相互の経験交流が取れることも目指されているとのことであった。たとえば、歴史の解釈や慣習に関するような質問がきた時に、どのように応じているかなどの難しいコミュニケーション内容を、会員限定サイト上でスレッド形式あるいは動画などを共有した交流がなされている。また、どういった研究が実際できるかの紹介を



図1 ブンカラ会員機関一覧 (笹木氏撮影)



図2 國學院大學博物館での協働展示 (笹木氏撮影)

相互にしあうなど、他組織・他機関に質問や悩み自体を共有できるしくみ、あるいは共同研究につなげていけるこのようなとりくみは、とても重要に思われた。また、このサイト上では、質問や要望などをかなり「ゆるめに」つまり提示でき、それに対する対処や解決方法についても自由に意見を出しあい、そのことで各組織のスタッフがそれぞれ変わっていけることを大切にしているようである。

何か、上意下達的な情報流布のためのネットワークではない、相互の悩みや経験を自由に出し合え、その解決方法も交流できるという点はとても素晴らしい。なお、さまざまな「悩み」については、その本質をとらえ、解決のためだけにとどめず、それらの悩みの背景にある本質的な事は何なのかを、参加者がそれぞれ発見していけるような、相互サポート的な関係づくりに腐心しているとのことであった。例えば「ある質問がきた時に、なかなか『パツとした綺麗な答え』はないけれども、それぞれの専門の見地から見たときに、どのように答えることができるのか、その分野の専門のかたをお呼びし、そのコメントなどをシェアする」ことなどは、質問内容に潜むさまざまな課題を博物館側がとらえて、自らの立ち位置を考えながらリファレンスや展示内容を含む博物館活動を行っていくうえで重要な取り組みと思われる。

展示室で起きること—新しい価値観の構築の難しさ—

また、フロアでの体験談もうかがえた。具体的には、「スタッフが着物を着て出てきたら、お客さんがわーっと盛り上がるなど、それはそれですごく良いことなんですけども、やっぱりそのステレオタイプのというか、写真をバシャバシャとってそれで喜んで帰って行かれるなど、それだけではなく、文化とは何なのか、なぜそれを大事に思うのかなど、そうしたことを考えてほしい。」「展示室では、たびたび『へー、エコロジカルな生活なんですね、いまでもそうなんですかね?』などが聞かれるが、過剰な神秘化や意味づけはしないようにしている。意味づけも差別のひとつととらえられることがあるので、留意して話しをしている。」とのことであった。こうした、その場での盛り上がりで終わったり、そもそも誤解があるがそれを丁寧に解いていくことができないなど、これは、博物館が提供する展示解説や体験ワークショップなどで、どのような館でも常に起きうることである。つまり、展示を含むさまざまな活動を展開する場合、そこには何らかのメッセージやストーリーが表現されているが、利用者は、まずはそれまで得ていた知識や体験から解釈するものであり、何か主体的に新しい考えをその場で瞬時に構築していくことは難しい。筆者の考えでは、その解釈を頭から否定することなく、しかしどうリフレクトしてもらうのかの機会が大事で、その新しい見方や価値観をつくっていく手助けのプロセスが大事であると思う。

たとえば、筆者もこの協働展示で、サケの皮でつくられた靴を目の前にした時、「エコロジカルな」印象や、「アイヌの人々の暮らし」への驚きなどを感じたのは確かである。しかし、笹木氏のお話をうかがって、もしかするとその驚きの中に差別的な意識が潜んでいるかもしれない、と自省した。たとえば、現在の生活において、私たち自身の生活では「サケの皮」は何に利用されているのか、あるいは、動物の皮革利用で行う「鞣し」工程に相当する作業とサケ皮の処理にどのような共通点があるのか、どのように強度と柔軟さを兼ね備えた靴ができるのか、私たちの日常との接合点に関する疑問はつぎつぎと湧くものである。つまり、自分自身の生活を支える自然物への関心なしに、「エコロジカルな印象」をもつことの危険性を筆者は意識したとともに、そのような印象について自省的に、誰と、どこで、どのように語ることができるのだろうか。

また、とくに北海道であれば、来館者にはアイヌ民族のかたが含まれており、知らずしらず、スタッフの対応の内容や、来館者の何気ない反応が、そのかたを傷つけ



図3 講演会の様子

ていることもあるかもしれないとのことであった。つまり、展示内容から受け取る知識や印象だけではなく、そのことについて「どういう場で語り合うのか」についても配慮が必要であろう。そうした配慮の問題は、館種を問わず必要なことと思われた。

この点に関して、動物園研究に身をおく立場として思い起こしたことを最後に述べさせていただきたい。西欧の動物園が世界のさまざまな「珍しい」動物の展示と並べて「人種展示」をした過去と共通した、「異」なるものへの偏見を生み出す作用が、現在でもアイヌ文化の紹介にはつきまとっているかもしれないことを知らされた。珍しいものとしての「比較」は、往々にして自分の置かれている環境で見聞きする「なじみのあるものを中心軸」として捉える認識方法であり、なじみあるものを含めた相互の差異を客観視し、「異」と感じる感覚を相対化するトレーニングが必要であろう。

終わりに

非常に限られた時間のなかで、プンカラ研修の紹介をいただき、その相互連携という組織論ではなく、関わる人々の日々の悩みや経験を分かち合う過程でこそ得られる知恵ということを強く意識させていただいたご講演であった。ぜひ、またウポポイの実践のお話や普及活動の広がりについても、うかがえる機会をもちたい（イヤイライケレ：ありがとうございました）。

全体の参加者数は、対面 18 名（内：学会員 12 名）、オンライン 17 名（内：学会員 15 名）で総計 35 名であった（図3）。たいへん積極にご意見ご質問をいただくことができた。参加者のみなさま、会場準備をいただいた國學院大學博物館の関係者、そして学会事務局に深く感謝いたします。

（並木美砂子 帝京科学大学）

「令和6(2024)年度社会教育調査」の中間報告

2025年7月30日に「令和6年度社会教育調査」の中間報告が、web上で公表された(https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa02/shakai/index.htm)。社会教育調査は、基本的に3年毎に文部科学省が実施する、社会教育行政・施設に関する全国対象の統計調査で、中間報告は、主要調査項目の数値を速報的に公表するものである。全調査項目の確定値は、2026年3月頃(過去の例では3月下旬が多い)公表予定だそうである。

2024年度の調査は同年10月1日現在、或は2023年度中のデータに基づくもので、博物館に関しては登録博物館・指定施設と、博物館類似施設の2本立てで調査された。前回2021(令和3)年度の調査は、新型コロナウイルス感染症の流行期、人々が行動制限する中での実施で、利用者数や各種の活動状況は相当抑制された数値であったが、今回はアフターコロナの段階となり、本来の姿に戻りつつある中で実施された。また、2022年の改正博物館法が施行され、経過措置期間中ながら、博物館登録制度等が改正されて初めての調査となった。

以下、データを示しつつ、若干の感想を述べたい。

館園数

総館園数は5,766館園で、前回3年前から5館減少した。法制度別では登録が969館園(対2021年度比(括弧内以下同じ)+58)、指定が375館園(-19)、類似が4,422館園(-44)であった。設置者別では広義の国立が238館園(+9)、公立が4,418館園(+38)、私立が1,100館園(-62)である。種類別では総合496館(±0)、科学453館(+6)、歴史3,329館(-10)、美術1,062館(+1)、野外120館園(-1)、動物93園(-4)、植物104園(+1)、動植物24園(+1)、水族85館(+1)となった。

今回の総館数の減少幅は僅かであったが、人口減少による財政の悪化や過疎化の進行等の社会情勢に加え、博物館開設ブームの頃に設置された館で、施設設備が老朽化する時期に差し掛かっている。多くの公共施設と同様、遠からず各地で博物館施設の維持、統廃合が議論されるようになる時代がやってくるであろうから、今後施設数の減少傾向に拍車がかかる可能性も考えられる。施設数の伸びのピークを過ぎ、博物館が生き残り戦略を考えるべき時期に差し掛かったのかもしれない。

登録の増と指定・類似の減から、法改正の狙いである、従来の相当・類似施設から登録館へ移行が始まったと見ることができよう。全体としては、移行の割合は僅かで

あるが、生き物を扱う園館の登録化が目立つ。5年間の経過措置の初年度で、今度の動向を見る必要がある。

私立館が5%以上減少した。新設館もあった上での減少であるから、閉館は対前回比の数以上であろう。統計値から閉館理由までは分からないが、コロナ禍が少なからず影響した可能性が考えられる。なお、従来私立館の設置者は統計上、一般・公益社団・財団法人以外はその他で一括されていたが、今回「その他の公益法人」「株式会社」「その他の営利法人」「個人・任意団体」に細分され、より詳細な把握が可能となった。

入館者数

2023年度間の総入館者数は5,567館園で2億6,920万6,098人、1館平均48,357人であった。コロナ禍の中で、緊急事態宣言に伴う休館や、密集・密接等を避けるため1日の入館者数に定員を設ける措置等が取られていた前回調査の2020年度間は、5,503館園で1億3,970万3,798人、1館平均25,387人であり、190%超と急伸した。しかし前々回調査の2017年度間は、5,569館園で3億3,060万8,882人、1館平均54,421人であり、コロナ禍前の89%程度まで回復したにとどまった。

職員数

博物館全体の職員の総数は、専任・兼任・非常勤・指定管理者による雇用を合わせて、55,989人であった。

施設長の男女不均衡状態改善を目指し、女性の館長を増やしていくことが謳われているが、館長全5,318人中女性は790人で、割合は14.9%であった。前回調査では5,267人中747人、14.2%で、実数は43人増加したが、比率では微増にとどまり、あまり改善していない。

学芸員は合計9,398人(+362)、1館平均1.62人、学芸員補は合計856人(-189)、1館平均0.15人であった。登録・指定館の学芸員は専任3,576人、兼任447人、非常勤672人、指定管理者886人の小計5,581人、1館平均4.15人になる。類似館の学芸員は専任1,407人、兼任869人、非常勤742人、指定管理者799人で小計3,817人、1館平均0.86人で、類似館では学芸員無配置の館園が、いまだ多くあることが窺える。

勤務雇用形態に注目すると、学芸員の場合、不安定な雇用とみられる非常勤・指定管理者による雇用が32.9%を占める。この割合は、前回調査時の33.3%とほとんど変わらない。館長・学芸系職員以外の「その他の職員」は、総職員数の72.2%、40,417人にのぼる。そのうち非常勤・指定管理者による雇用は63.1%を占め、日本の博物館は、不安定な立場で働く多くのスタッフにより支えられていることが、浮き彫りとなった。

(菅野和郎 玉川大学)

博物館類似施設とは何か？（その1）

—広島県江田島編—

1. 博物館類似施設とは何か？

博物館学の学会はもちろん、博物館業界内では当然理解されているはずのことについて、まず「博物館類似施設とは何か？」と、挑発的な物言いをするのだから、何のことかと思われるだろう。しかし、果たして誰が本当に博物館類似施設を知っているのだろうか。それをまず確認したい。というのも、ご存知のようにどの館が博物館類似施設であるのか、ほとんど知られていない。社会教育調査にて博物館類似施設と記されるものの、数だけが示され、その実態（具体的な館名）が国からは公表されていないからだ。

そんな中、県によっては登録博物館・博物館相当施設とともに、博物館類似施設が公表されている都道府県があることを先の研究大会にて報告した⁽¹⁾。なかでも平成23年度から現在に至るまで毎年調査を実施し、公表しているのが広島県である。では実際に博物館類似施設、さらに言うと、類似施設にも含まれていない施設を紹介し、博物館とは何かということを考える一助にしたいと思う。

2. 公表されている広島県の“博物館”

広島県は「広島県生涯学習振興行政・社会教育行政基礎調査」（以下、「広島県調査」）を公表しており、毎年度の状況を知ることができる。広島県教育委員会事務局によれば、本調査は公立・私立登録博物館・博物館相当施設、公立博物館類似施設、公民館、公民館類似施設、生涯学習センター、青少年教育施設、女性教育施設、視聴覚ライブラリー、その他社会教育施設を対象として、県又は市町の所管課（所管課は首長部局又は教育委員会）に対して調査を依頼し、私立館については、私立館に直接調査を依頼し、回答を得ているものであるという。これは、国の実施する社会教育調査の調査経路が「市町村教育委員会」だけであるのに対して、広島県の場合「首長部局」が含まれる。そのため、二つの調査データは完全に一致しているわけではない。社会教育調査での公立博物館類似施設の合計数は、国・独立行政法人立の7館を除いて94館であるのに対し、広島県はそれより3館ほど少なく、齟齬が生じている。非回答による測定誤差だと考えられるが、社会教育調査の個別館名が公表されない以上、広島県調査の回答に基づき、①「公立登録博物館・博物館相当施設」②「私立登録博物館・博物館相当施設」③「公

立博物館類似施設」を扱っていくこととしたい。令和6年度の結果では、①が24館、②が13館、③が91館となっている。そして③では公立に制限されるものの、博物館類似施設として扱われている施設名等の情報が明らかとなっているのである⁽²⁾。このような博物館類似施設名が明らかとなっている事例は、登録/相当/類似別の実態把握を進めるうえで欠かせないものである。

3. さとうみ科学館

江田島市は、広島港から船で20分ほど、呉駅からは車で40分ほどの島嶼部であり、現在は橋により結ばれている。平成16年（2004）に旧江田島町、旧能美町、旧沖美町、旧大柿町が合併して江田島市となり、令和7年（2025）1月時点で、人口20,690人、高齢化率は47.2%となっている。

さとうみ科学館の位置する旧大柿町は、合併前の2004年10月の人口が9,056人となっている。合併前より上水道、火葬、消防、し尿・ゴミ等、介護については、上述4町で結成の広域事務組合でまかなわれ、旧大柿町のホームページによれば、当初は2002年の合併を目指して動いていたようである。

本施設、「大柿自然環境体験学習交流館」は、平成12年（2000）、大柿町制45周年の記念事業を前身として、平成14年（2002）4月に「大柿町自然環境体験学習交流施設（環境館）」として開館したものである。

市町村合併により現在の名称に変更、そして平成22年（2010）に「さとうみ科学館」の愛称が決定した。ここで、簡単に前身となった「大柿町海辺の生き物調査団」について紹介したい。2002年より2年2か月の期限付きの事業ではあったものの、ニュースレターが全戸配布され、調査団を募るところからはじまり、記念誌の刊行に至るまで「町民の、町民による、町民のための」事業が目指された。記念誌に掲載されたニュースレターには、調査団ではない町民が、調査で使うものを寄附したり、調査団に声をかけてくれたり、情報提供をしてくれたりしている様子が見える。例えば、「保護者から標本ビン、大柿町中央公民館からビニール袋と標本ビンをいただきました」とか、「今回は、町の消防団とアマチュアのダイバーの方々の協力があり、いっそう充実した調査会になりました。また、大柿高校の教頭先生は自家用船舶を出してくださいました」。あるいは、「近くにお住まいのEさん（主婦）やご近所の方々が声をかけてくださいました。（略）ちょっとした立ち話からどんどん昔話に話が広がりました。「昔はねえ、この海岸にもたくさんアサリやマテガイ、カガミガイ、ホウキガイ

が採れたのよ」など⁽³⁾。毎月2回、このようなニュースレターが自宅に届くことにより、調査団に参加しなくても、あるいはできなくても、事業に理解が生まれるものと想像される。現在、館長、学芸職員（専門員・主任）、運営指導員2名、支援員、地域おこし協力隊（内、館長を含む3名が正規職員）という組織で教育委員会の所管する施設となっているが、こうした人の配置や令和6年度江田島市総合教育会議の議事録を見ても、市になっても市民からの科学館への信頼が厚いことが見てとれる⁽⁴⁾。

それでは、具体的に施設の様相を確認し、そこがまさに“博物館”であることを、明示したいと思う。

さとうみ科学館は、もとは小学校の建物を利用した施設で（写真1）、設備面などにおいては必ずしも恵まれた環境にあるとは言い難い。しかしそういうことをあっさり上書きするほどの活動の数々に目を奪われた。

館に入るとまずアクアギャラリーという部屋がある。水槽展示をメインとするが、その部屋の真ん中にタッチングエリア、いわゆるタッチプールがあるのではないかと（写真2）。そして牡蠣養殖の水槽（写真3）を見るに、宮島水族館の見事な牡蠣養殖展示を思い出しつつも、ここまで身近に観察できることの凄さも感じるのである。

そのほかの展示も、知識を押し売りするのではなく、わかりやすく、時に楽しみながら見ることができる。貝殻を見せるのに、すしネタの写真と結び付けたり、またはトリック写真を撮影して楽しむ仕掛けがあると思えばそのトリック写真の仕組み（作り方）まで明らかにしたりしている。

そして、「海辺の生き物イラストカレンダー」というポスターがつくられているのだが、その仕掛けが実に素晴らしい。「ふるさとの自然」作品コンクールを開催し、毎年800件以上、多い時は1000件の応募がある。小学校の低・中・高学年の部と中学校の部の4部門に分かれていて、そこから優秀賞を選んでカレンダーの図柄として採用しているということなのだ。応募は江田島市内の小中学生に限られるようで、その件数の多さは、児童・生徒数から見ても明らかである。というのも、江田島市内の小中学生の数は、令和6年度において小学生678人、中学生352人で、合計1,030人という。ちなみにコンクール応募者数は893人である⁽⁵⁾。またほかの年を見ても、江田島市内の8割前後の小中学生が取り組んでいることが確実にわかる。そして、9年間は応募し続けられるということだから、入賞の機会もそれなりに用意されているということになるだろう。さらに驚くことに、応募者全員に参加賞はがきを贈っているということなのだが、ニュースレターのある号のあとがきに次のように書かれていた。



写真1 さとうみ科学館



写真2 アクアギャラリー



写真3 牡蠣養殖展示

「ふるさとの自然」作品コンクールの参加賞はがきを今、作成中。みんな素敵な作品ばかりではがきにするとまた素敵！楽しい作業ですが、なにせ976枚分。間違えのないよう気をつけています。手元に届くのを楽しみにしててください。

入賞者だけではなく、応募者一人一人に向き合う姿勢がここにある。子どもたちの成長にここまで取り組む姿勢を持つというのは、並大抵のことではなからう。江田島の子供たちは、なんと幸せな環境にあるではないか。そんな活動の蓄積も展示に見ることができる（写真4）。まさにここは江田島出身者のふるさとなのだ。

改めて同館のWebサイトを訪問し、【活動方針】を確認すると、以下のとおり記されていた。

さとうみ科学館では、身近な自然に直接ふれながら、島嶼部ならではの自然「海辺の自然」、「ふるさとの



写真4 歴代のイラストカレンダーの展示

自然」をテーマとした学習や科学研究を支援しながら、自ら学び自ら考える力を育てる学習活動の場を提供していくことを目的に、地域性を活かした理科教育・環境教育の充実・活性化を推進しています。

単に、既存の知識を教え、展示物を見せることを目的とした施設ではなく、自ら地域の自然を研究しながら、「もの」や「情報」を集め、市民のみなさんがそれを利用しながら、調査・研究・学習・交流ができる「市民に開かれた研究機関」でありたいと考え、様々な事業を企画・運営しています。

そこには教育施設であり、研究施設であり、およそ博物館の機能を満たしていることが理解されるのであって、見事なまでに“博物館”としての矜持を感じ取れるのだ。

ところで、ここで衝撃の事実を明かさねばならない。さとうみ科学館は、登録博物館なのだろうか、博物館指定施設⁶⁾なのだろうか、それとも博物館類似施設なのか。実は統計上、同館はそのどれにも当たらず、「その他の社会教育施設」に分類されている。広島県調査のいうその他の社会教育施設とは、「社会体育施設を除いた教育委員会が所管する各種ホールや教育集会所等の社会教育施設等」である。まさかとは思いますがそれが事実なのだ。

4. 改めて、“博物館”とは何か？

ここで学会員の皆さんに問いたい。博物館を見る時、そこが登録博物館なのか、指定施設なのか、博物館類似施設なのか、それを確認していますか？または、それがどれに当たるのか、またはいずれにも当たらないのか、知っていますか？

ここに紹介してきたように、さとうみ科学館という実に見事な“博物館”活動をしている施設であっても、博物館類似施設にも含まれていない事例というのがあるのだ。つまり、我々は法的位置づけなど不要であると言わなければならないのではないだろうか。

令和6年度の社会教育調査では、登録・指定施設が1,344館、博物館類似施設が4,422館で、合計5,766

館である⁷⁾。しかし、ここに5,767館目の、実に素晴らしい“博物館”があるのだ。いかにも知っているとかばかりに登録博物館、博物館指定施設、博物館類似施設を語っていることが恥ずかしくなってくるのではないかな。

なぜ我々は登録、指定、類似でいかにも当然の如く語ってしまうのだろうか？

本当の“博物館”とは何なのか？

さとうみ科学館を見るに、“博物館”とは何かを改めて問うことが必要なのではないかと思うのだ。

註

- (1) 2025年7月5日、第51回研究大会にて以下のとおり発表した。
武井二葉「社会教育調査における博物館類似施設の実態と文化資源としての可能性」
- (2) 「ホットライン教育ひろしま 広島県生涯学習振興行政・社会教育行政基礎調査」<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/syougaiagakusyu-kisotyousa.html> (令和7年8月18日検索)
- (3) 大柿町海辺の生き物調査団編 2022『大柿町海辺の生き物調査団 その歩みとドラマ [歩み編]』広島県佐伯郡大柿町
- (4) 「令和6年度第1回江田島市総合教育会議」<https://www.city.etajima.hiroshima.jp/cms/articles/show/10588> (令和7年8月18日検索)
- (5) 西原直久館長のご教示による。
- (6) 周知のごとく、現在「博物館に相当する施設」は「博物館指定施設」と呼称される。ただし、法令上は「博物館指定施設」という言葉はない(法令上はすべて「指定施設」と記される)。敢えて言うならば「博物館に相当する施設」を「博物館相当施設」と略称することがあるように「博物館に相当する施設に指定した施設」(下線部筆者、ただしこの「」内の言葉も法令上は見当たらない)の略称であって、本来そういった法令上の言葉の使用をいちいち説明しなければならないはずだろう。
- (7) 令和6年度の社会教育調査中間報告は以下を参照。
「e-Stat 政府統計の総合窓口 統計で見る日本」<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400004&tstat=000001017254&tclass1=000001230866> (令和7年8月18日検索)

【謝辞】さとうみ科学館の西原直久館長には、資料をご提供いただいたほか本稿にも事前にも目を通していただき、種々ご教示いただきました。記して感謝申し上げる次第です。

(武井二葉 明石市立文化博物館・山本哲也 國學院大學)

**【紹介】大阪市立自然史博物館
特別展「学芸員のおしごと」について**

大阪市立自然史博物館で2025年11月1日から特別展「学芸員のおしごと」が開幕する（会期は2026年2月1日まで）。私が所属する（地独）大阪市博物館機構のX (@OsakaMuseums) で、この展覧会予告を投稿したところ2025年10月末現在で5万回表示、379リポスト、903いいねがあり、学芸員の仕事に対する興味関心の高さに驚いた。キャリア教育への社会的な要望が高まっている影響なのか、全国で1万人もいない学芸員の仕事に対するの興味はどこからきているのだろう。

本展覧会の企画背景について担当学芸員に聞いたところ、①学校から学芸員の仕事についての講義等リクエストが増えており、キャリア教育の要望を感じていた、②学芸員の仕事は知られていない現状がある、③学芸員の仕事を通して、博物館の活動自体に興味をもってほしいということから企画したとのことだった。私は、総務課職員として学芸員の仕事を側で見てきたが、その仕事の地道さと多様さへの驚きとともに、積み上げた先にある成果としての展示や普及活動等を含めておもしろさを感じ、学芸員の仕事についてぜひ伝えたいと思ってきた。そこで、学校での探究活動等での活用を目指し、学芸員の研究活動に注目した学校向け貸出展示キット「博物館の学芸員の仕事～研究って、どうするの？～」を完成させた。展示キットの内容等についてはまた別の形で発表ができればと思っているが、展示では私自身の研究成果の一部も生かされている。

本特別展は、学芸員の仕事をテーマにしているが、軸になっているのは「標本」である。また、2022年以降に収蔵された新収資料のお披露目の場も兼ねている。

- 第1章 学芸員のおしごと
- 第2章 まずは「集めよう」
- 第3章 新しく博物館にきた標本
- 第4章 標本を「守る」
- 第5章 標本を「調べる」
- 第6章 みんなに「見せる」
- 第7章 博物館をとびだして
- 第8章 学芸員が伝えたいこと

展示構成は以下の通りであり、開幕に先立ち展示見学をしたので、私自身のおすすめを紹介する。

第2章「まずは『集めよう』」では、標本を集める意義とともに、標本とはどのようなものか、収集方法や、

たくさん同じ種類の標本を集める理由などが紹介されている。標本ラベルには、植物や昆虫などの名前だけでなく、クジラの化石標本なら「表面についた砂や泥を取り除き、骨の内部を特殊な薬品で補強して標本にしている」など、標本がどのように工夫されて作られているのかも説明されている。学芸員の仕事貸出展示キットの開発途中で、教員等からおもしろいと評価された採集道具なども多数展示されている。

第4章「標本を『守る』」の収蔵庫のコーナーは、一押し展示である（図1）。ほぼ原寸大の収蔵庫写真の前に収蔵棚と収蔵資料が配置されていたり、収蔵庫前の入口にある靴裏のゴミや埃を取り除く粘着マットを実際に踏んでみる体験があったり、収蔵庫の一部をそのまま持ってきたような展示になっている。標本を管理する上で収蔵スペースが足りなくなってきた課題があるなか、いかに省スペース化し標本を管理しているのかという展示もある（図2）。また、保存科学担当の学芸員によって標本の大敵である害虫やカビ、IPMの取り組みなども紹介されている。また、これに関連し特別展来場者先着2,000名に、「見つけたら教えて！博物館の害虫」カードをプレゼントする企画も用意されている。

第5章では、標本は整理され収蔵されるだけで役目が終わりではなく、その後も学芸員を含めた研究に携わる人々によって活用・研究され、新しい発見につながるということが語られる。

学芸員の仕事は、多岐にわたる。展示や普及教育活動はもちろん、標本のデジタル化、多様な人が博物館を利用しやすいようにするための取り組みなど、ますます多様になってきている仕事についても紹介されている。学芸員の仕事を多面的に紹介しつつも、標本を軸にするというのは、博物館の資料である標本をいかに大切に思っているかの表れだろう。一般来場者だけでなく、博物館関係者の反応も見てみたい。



(左) 図1



(右) 図2：小さな標本瓶を大きな標本瓶に入れることで保存液の蒸発防止と棚の底面積の節約になるという説明がついた展示。

(釋知恵子 地方独立行政法人大阪市博物館機構)

委員会議事抄録

【2025年度 第2回定例委員会】

2025年10月28日：オンライン（ZOOM）

出席者：半田、内川、芦谷、粕谷、金山、菅野、栗原、
五月女、佐藤、島、下湯、高田、高橋、並木、
持田、山本

議事（議長：半田会長）

(1) 総会及び大会事項

本年度総会・研究大会について参加者アンケート結果等を踏まえながら振り返り、次年度総会・研究大会の開催方針について確認した。

(2) 研究会事項

第2回研究会の開催に係る予算執行について、原案の通り承認された。

(3) 全日本博物館学会会長・委員の選挙及び監事の選任に関する細則の改正について

次年度に開催予定の第32期役員改選を控え、前回選挙委員会の勧告に基づく改正案について議論、次回委員会においても引き続き検討することとした。

(4) 全日本博物館学会創立五〇周年誌の献本について

『全日本博物館学会創立五〇周年誌』を関係団体へ献

本する件について、原案通り承認された。

(5) 後援依頼について

他団体からの後援依頼について、承認された。

(6) 全日本博物館学会の今後の在り方について

本会の今後の在り方について共有あり、次回委員会を対面にて開催し、本件を議題とすることを確認した。

(7) その他

正会員の入退会について報告があった。

会員情報

入会者（正会員7名・2025年10月時点）

木原みな子	高瀬光貴	高田拓海
高橋美奈子	藤井 英	丸山啓志
山本 航		

退会者（正会員1名・2025年10月現在）

米田耕司

会員数（2025年10月現在）

一般会員（学生会員を含む）	483名
賛助会員	11団体

お知らせ 年会費の納入について

2025年度会費をご納入いただけていない方は、①・②いずれかの口座まで8,000円をご入金ください。本学会の円滑な運営に、何卒ご協力を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

①郵便振替 00170-4-26144（加入者名：全日本博物館学会）

②三菱UFJ銀行 池袋支店 普通預金：1304291（口座名義：全日本博物館学会）